



JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Monday 14 May 2007 (morning)
Lundi 14 mai 2007 (matin)
Lunes 14 de mayo de 2007 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.

次の I (a) の文章と I (b) の詩のうち、どちらか一つ選んで解説しなさい。

I (a)

5
10

しかし、どれだけ歩いて、周囲の様子に変化はなかった。木々は私に無関心にただ立ち並び続け、僅かな傾斜はあったが、地面にはどこまでも土と落ち葉が広がっていた。同じ場所をぐるぐると歩いているように、その不変は気味が悪く、少しずつ私を動揺させた。どこまでも広がる、無機質な、木々の羅列。私を囲い、その中に封じ込めるように、まるで全て計算されているかのような、空に伸びる直線の連続。足に痛みを感じ、全身に汗が滲んだ。だが、一度風が吹くと、周囲の様子は一変した。空気を裂くような轟きの中、全ての木々が揺れ始めた。暗闇の中でうごめくその葉の茂りの集合は、一つの巨大な生物のように迫り、叫ぶような轟音で歌いながら私の方へと襲いかかるように思えた。恐怖に足がくすみ、その度に歩くことができなくなった。落ちていた太い木の枝を拾い上げ、力を込めて握りしめた。とにかく、同じ方向に歩き続けなければならないと思った。その方向が間違っていたとしても、私にはそうすることしかできなかった。

15
20

目の前に動く影を見た時、全身が痙攣するような恐怖に、息ができなくなった。私の胸ほどの高さの生き物が二つ、少しずつ、少しずつ、私に向かって動いてきた。野犬だった。飼い犬とは明らかに違う、太い、濁りのある鳴き声を上げ、その飢えを主張する荒く湿り気のある呼吸は、私のどんな行為も通用しないことを明らかに示していた。私は、絶望を感じた。自分の身体がどこまでも、下へ下へと落ちていくようだった。私が食料をもっていないということは、彼らの狙いは、私自身に違いなかった。そういうことなのか、と私は思った。結局自分はいかなる運命であり、あの狭い部屋から抜け出ることができたとしても、私は周囲を、常にこういった障害に囲まれ続けているのだと思った。走る力は、もうなかった。彼らは少しずつ、私との距離を縮め続けていた。

25

だがその時、大きな感情が私の中で動いた。それは自分には似つかわしくない、狂暴な、荒々しい力の渦のようだった。突然芽生えたそのうねりは、驚いている私を凌駕するように全てを支配し、気がつくやうに、声を失っていたはずの私は、身体の底から噴き出さるような叫び声を上げていた。あの時、私は犬に向かって叫んだのではなかった。犬の向こう側にあるもの、私を痛めつけた彼らの、さらに向こう側にあるもの、この世界の、目に見えない暗闇の奥に確かに存在する、暴力的に人間や生物を支配しようとする運命というものに対して、そして、力のな

30 いものに対し、圧倒的な力を行使しようとする、全ての存在に対して、私は叫んでいた。私は、生きるのだ。お前らの思い通りに、なつてたまるか。言うことを聞くつもりはない。私は自由に、自分に降りかかる全ての障害を、自分の手で叩き潰してやるのだ。

35 私は掴んでいた木の棒を両手で握りしめ、犬に向かって飛びかかった。ありつたけの力を込めて、泣き声とも、威嚇の声とも区別のつかない叫び声をあげながら、狙いもわからないままに振り降ろした。鈍い振動が両腕に走り、手放したくなる痺れに耐えながらも一度、さらにもう一度と、棒を振り回し続けた。後方で唸り声を聞いた瞬間、そちらに向かって棒を振り上げた。できるだけ身体が大きく見えるように両腕を上げながら、相手よりも速く動かなければならないと思った。決して、躊躇してはならなかった。私の一撃は当たらなかったが、犬が、背を向けて駆けていくのがわかった。私はなおも叫び声をあげ、勢いのままに棒を振り回し、追いかけようとした。犬が逃げていくのを見ながら、全身の力が抜け、その場に座り込みそうになったが我慢して歩いた。まだ、周囲の風景に変化はなかった。どこまでも続く木々の羅列は、なおも私に無関心に、ただ静寂を保っていた。

45 それから、どれだけ歩いたかわからない。幾つもの傾斜を越え、幾つもの水溜りを飲み、幾つもの木々の間を通り抜けた。周囲が段々と青く、うつすらとした光に照らされ始めた時、自分が、しばらく太陽の光を浴びていないことに気がついた。頭がぼんやりとし、自分が照らされていく感覚の中で、その場に倒れ込んだ。光は暖かく、柔らかく、徐々に冷え始めていた空気に温度を吹き込もうとしていた。目を閉じると瞼の裏がうつすらと青く、暖かな土の匂いがした。私の記憶は、そこで途切れた。

50 やがて私は、散策に来ていた中年の夫婦に見つけられ、病院に運ばれた。

(中村文則 『土の中の子供』 二〇〇五年)

I (b)

声

広やかな河口に
あふれる水
瞼のうえに
夜明けがおとずれる

5

あけぼのの
予兆のなかを
岸辺の川波をくぐりぬけて
白魚たちが

10

産卵のために泳ぎつく朝
透明なその身の丈三寸のうちを
時代の汚れが通りぬける

15

心臓も歌え
ユキヤナギが震えながら
花びらを散らすように
奏楽のようにしてひとつの諧調へ向かつて
身をふるわせ

20

ゆたかにふくれる川の水
小さな叫びとともに土地から土地へ
生命も運ばれてゆく
もし太陽がどんより垂れかかることがあっても
川面の水のつよい張りが
水平線を支える

25

水は
あふれこぼれるのではなく
休むのでもなく
不可逆の軌道にそって 人びとの体内をも流れ
往くものに

- 絶対自由へ
跳べ とおしえる
- 30 一本の竹にしても 地球の脈搏を
短くも長くもなく関節のなかでひびかせている
- すべてはかすかな声だが
声も
傷つきやすく
- 35 ふくらみ 血も吐き
産む
- その開ける裂け目から
閉じていた門はひらくのか
おそらく
- 40 世界の傷口に
かさなる傷

(田中清高 「声」 二〇〇六年)

シラギ
白魚

主に海水と淡水の混じり合う汽水域に生息するが、早春には遡行して泥砂の多い河口などに産卵し、一年で寿命を終える。